

テストの点数について

先週、算数と社会のテストを行いました。見ていただいたと思うのですが、私はテストに点数をつけることをずっとしておりません。教師になりたての頃、点数を付けたテストを返すと、点数が書かれたテストの角を折り曲げている子どもを見つけました。友達に悪い点を見られたくないから隠していたのでしょうか。そのような場面を見ると心が痛みます。「教師がテストで点数を付けることに何の意味があるのか？テストでは、自分の誤答にしっかりと目を向けてほしい。」こう思い、勤め始めて数年だけ、点数を付けたテストを返していましたが、それ以来点数をつけていません。ただ、満点のみ☆をつけています。

私は、点数をつけることが間違いだとは全く思っていません。テストの点は、自分の出来具合の「ものさし」になるし、次のテストへの励みになります。ですから、点数をつけたい子どもには、自分で点数を付けるようにと言っています。テストの△などの部分点や減点などあるときは、子どもは自分でも点数がわからないので、「点数がわからなければ、聞きにおいで。」と言うようにしています。テストの点数を聞きに来た子どもには、その場で点数を教え、自分

で点数をつけてもらっています。

毎回テストを返して、答え合わせをしています。必ず赤鉛筆、高学年であれば赤のボールペンで正しい答えを書くよう指導しています。テストを返すとすぐに消しゴムで誤答を消す子どもがいますが、自分の誤答を消さずに、残すように言っています。正しい答えとどう違うのを見比べるようにするためです。

このような私のやり方に対して、「100点をつけて褒めてあげることではできないのか」「点数は評価のごく一部であることを教えることが教育ではないのか？」とか、これまでも批判的なご意見を頂きました。しかし、やはり先に挙げた子どもがいる限り、できないなと思うのです。これは長年の私のこだわりなので、ご理解頂きたいと思います。

連載—三六年間の教育を振り返る③—

スपोर्टニク・シヨック

前回、「ゆとり教育」が始まったのは、「詰め込み教育」が子どもを荒れを招いた反省からであり、致し方のない時代の要請であったことをお話しました。では、なぜ「詰め込み」が始まったのかというのが今回のお話です。

米ソ冷戦下の一九五七年（昭和三二年）にソ連が人工衛星スプートニク1号を打ち上げました。これに一番驚いたのがアメリカでした。ソ連に負けない科学技術を発展させること、そのためには学校教育の充実が急務とされたのでし

た。戦後教育をアメリカの指導の下、進めてきた日本でも「教育の現代化運動」が起り、かなり高度な内容を教えようとしたのです。それまでの経験を重視した教育から、教科ごとに体系化された知識を教え、教育内容を増やす方針を打ち出し、これが「詰め込み教育」となったのでした。授業時数も増えた上に、内容も高度であり、進路が速くついていけない授業を「新幹線授業」と揶揄されました。

この間、学力テストも実施されています。現在も二〇〇七年より、小学六年、中学三全員を対象に、全国学力テストが始まりましたが、過去にも「教育の現代化運動」を受けて、一九六〇年前後に学力調査(学テ)が行われていました。学校間の競争が激化して、一九六四年には中止となっています。学テ当時の様子は「教育残酷物語」として書籍にも出版されています。この話は次回に。

私が教師になってからの教育の流れ

- 1971 **学習指導要領改訂**
現代化カリキュラム (詰め込み)
- 1980 **学習指導要領改訂**
- 1985 小学校採用となったが、養護学校で体育教師として教養護学校が始まる。
- 1988 養護学校から
- 1992 **学習指導要領改訂**
新学力観 (個性をいかに教育)生活科の導入
- 2002 **学習指導要領改訂**
ゆとり教育 「生きる力」総合的な学習の時間完全週五日制
- 2003 歯止めの撤回 (発展的な学習)
- 2011 **学習指導要領改訂**
ゆとり

今回はこの辺りのお話

子どもの日記を載せます

第一回目―満君の日記から

ずっと前のある夏休みのことでした。書齋というほどのものではないですが、本を置いてある部屋を整理していると、今までに書いてきた学級便りが出てきました。読み返していると、これがまたおもしろくて、受け持ったいろんな子どもの顔が浮かんできました。

初めて受け持った養護学校の子どもは、今では四〇歳以上になつています。いろんな子どもが頭の中に浮かんで、文字が命を吹き返します。整理するのも忘れて、ずっと読んでいました。「そう、こんなにおもしろい子どもの日記があるのだから、それを閉じ込めておくのは勿体ない。」と思い、おうち向け学級文集に子どもの日記を面に載せることにしました。これが、結構好評だったので、引き続き、今年度もやってみようと思います。

今まで数限りなく子どもたちに日記や作文書いてもらい文字にしてみました。それらを読んでいると、つくづく子どもの表現って素敵だなど思います。子どもの感性と云うか、子どもにしか出来ない表現というか、そんな宝のつまった日記を、私の教師としての思い出と共にお知らせしたいと思うのです。

初めは、私が一番多く受け持った高学年の子どもの作品です。クラスの中に私と同名の「満」君という子どもがいました。この子の書く日記が

とてもおもしろくて、毎回読むのを楽しみにしていました。日記にはお母さんが多く登場しています。家族のことをしっかりと観察して日記に書いています。

□「怪人二十六面相」 五年 満

ぼくのお母さんは、おこったりわらったり、ふだんからたいへんいそがしいです。ものまねだって得意です。声もとても大きく、家でおこられていると、外まで聞こえているらしいです。

でも、一つふしぎなことがあります。それは、ぼくがガミガミおこられていても、電話がかかってくる、と、

「はい、もしもし。」

と声がおもいきし変わります。お母さんは、むだ話が多いので、その間、ぼくはおこられずにすむのでいいけど、ずいぶんたって、また、お母さんにおこられます。

それから、しばらくたって、ベル(飼っている犬)がなく、

「ベル君。」

とやさしい声を出します。ベルと赤ちゃん言葉のお話が終わると、ぼくは、またおこられます。

ずいぶん声の変わるお母さんは、かい人二十六面相だと思えます。

1997.6.11

□「犬がしゃべる」

満

いつもぼくは、お母さんに、

「お母さんの事あんまり日記に書きなや。」

と言われていますが、家で一番変わったことをするのは、お母さんです。

この間から、お母さんは、犬に言葉を教えています。今までは、「ご飯の時には、「待て」と「よし」だけで、何も芸を教えていませんでした。けど、今では、ご飯の時、

「ごはん、ご、は、ん。」と言ってみ。口を丸く開けんねんで。」

と話しかけています。

すると、初めはワンワンとしか言わなかったベルが、お母さんの口を見て、

「ワン。」

と言うようになりました。

このごろでは、お母さんがえさを持って、ちっちゃい声で、

「ごはん言ってみ。」

と言うと、ベルは、ちっちゃな声で、

「ワン。」

と言います。

本当に不思議な話ですが、しゃべっているように聞こえます。

1998.6.12